第11回　日本医師会

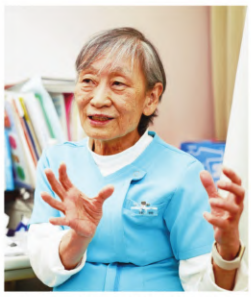
赤ひげ大賞

体力続く限り向き合う

地域で献身的な医療に取り組む医師を顕彰する第11回「日本医師会　赤ひげ大賞」（主催・日本医師会、産経新聞社、特別協賛・太陽生命保険）の表彰式が3日、東京都内で行われる。大賞を受賞した5人の医師の日々の活動と功労賞受賞者を紹介する。

第11回赤ひげ大賞（5人、順列は北から）

尾﨑眞理子（大　阪）尾﨑医院理事
石島　正嗣（兵　庫）青心会メンタルクリニック／医療法人社団青心会前理事長
桜井　えつ（徳　島）住友医院副院長
藤野　孝雄（大　分）藤野循環器科内科医院理事長・院長
大久保直義（鹿児島）希望ヶ丘病院理事長



尾﨑眞理子氏（東大阪市）

モノづくりのまちで働く母親支援

昨年10月から放送中のNHK朝の連続テレビ小説「舞いあがれ！」の舞台で描かれるモノづくりのまち・大阪府東大阪市で、小児科医として、働く母親らの子育てを支援する地域医療や保育に長年従事してきた。

今回の受賞に「私が本当にもらっていいんだろうかと思う」と驚き、「夢をかなえようと支えてくれた周囲のおかげ」と感謝する。

学生の頃は女性が仕事を選ぶ選択肢が限られる時代。夫で小児科医の元さんの父、弘昌さんが運営する医療法人尾﨑医院（同市）で小児医療に携わる中、自らも働く母親として「子供が急に病気になっても、あずけられる施設があればいい」と思うようになった。

自身の貯金を元手に義父や夫らの支援もあり、今から15年ほど前の平成20年4月、同医院が入る近鉄若江岩田駅（同市）の駅前ビルに病児保育室「ウルル」を開設した。中小零細企業で働く母親が仕事を休まなくてもよいように急病の乳幼児を一時的にあずかる施設だ。

同室（広さ約80平方㍍）の定員は1日当たり最大6人。あずかった乳幼児らの病気の状況を見つつ、疾患や感染予防などの専門的知識を持つ保育士らがマンツーマンで、朝から夕方まで遊びも取り入れながら、母親が迎えに来る時間まで一緒に過ごす。開設以来延べ1万2千人以上が利用した。

ただ、不採算部門であり、同医院が赤字を穴埋めする状況が続く。そんな中でも、寝てしまんどい子供らが、ママのお迎えが来ると元気になって抱きつく様子などを見ると、やりがいを感じる」と語る。

今後も少子高齢化で仕事と家庭を両立して働く女性が増えるとみられる。病児保育のスタッフの処遇改善▽地域の保育士と同様の処遇改善▽を国に要望したい。

東大阪市の委託を受け、乳幼児やその母親らが交流できる子育て広場「きらりっこ」なども運営。古希を過ぎ、こうした地域密着事業を「引き継いでもらえる方が見つかれば」と話す。夢を託す思いを抱きながら、地域の母子らのために生涯をささげる。

（文・西川博明、写真・南雲都）

石島正嗣氏（兵庫県川西市）

地域の「安心のとりで」担って40年

40年以上、精神科医として認知症の当事者や家族からのさまざまな相談に応じ、地域住民に寄り添い続けてきた。まさに地域の「安心のとりで」だ。

認知症が進行していくことに不安を抱える当事者や、どう接すればよいか苦悩する家族など、寄せられる悩みは広く、深い。自身ももうすぐ80歳を迎えるが今もカウンセリングなどを通して、患者と向き合う。

「患者を緊張させず、まずはリラックスしてもらうことが大切。ただの知人として話を聞きます」と、あえて診察中は白衣や聴診器など「医師っぽいもの」は身に着けない。診療所内も和やかな雰囲気作りを心掛ける。

昭和53年、クリニックの前身「石島診療所」を開業した。当時の川西市の人口は約15万人で、同診療所を含め、地域で精神科医療を担う機関は2施設のみだったという。「精神疾患に苦しむ人々に寄り添いたい」と、うつ病や統合失調症患者の相談に応じてきたが、そのうちに「物忘れがひどい」「人が変わったようになった」など認知症を患う高齢者が家族らと訪れるようになった。

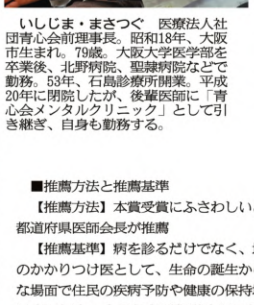
高齢化が進めば認知症の問題は深刻になる」と危機感を強めていった。また高齢者の認知症が社会問題として注目される以前のことだ。

平成4年には、同市へ呼びかけ認知症電話相談事業を創設した。16年ごろからは相談数が一気に増加。患者や家族たちの不安を受け止め、患者を適切な医療や福祉施設などの行政へつなぐセーフティーネットの役割を果たしてきた。認知症への理解が進んできた今も、後輩医師らと継続して相談に応じている。

認知症の発症は、定年退職後など人に会う機会が減った高齢者に多くみられることから、一人暮らしの高齢者に気を配り地域のサロンなどに参加を促す。「孤独な人をつくらないことが大事」との思いからだ。

受賞については「自分のやってきたことが社会の役に立てていると実感できた」と喜ぶ。「体力の続く限りこれからも地域の方と向き合っていきたい」と優しく語った。

（文・鈴木源也、写真・南雲都）



松本吉郎会長　日本医師会

地域医療を守る医師を支援

平成24年に創設した本賞も、今回で11回目を迎えることができました。日本医師会にとりましても大変重要な事業の一つとなっており、ここまで本賞へご協力くださった皆さま方に改めて深く感謝申し上げます。

今回は新たな試みとして、地域医療を志す医学生の方々にも選考委員に加わってもらい、将来このような医師になりたい」という視点から受賞者を選考していただきましたが、受賞者の先生方はまさに「赤ひげ先生」と呼ぶにふさわしい方々ばかりであり、その活動には、私も診療に従事する医師の一人として頭が下がる思いをいたしております。

国民の皆さまにはぜひ、本賞を通じて、地域に深く根差した医療活動を続け、患者さんからの信頼も厚い今回の受賞者のような医師が各地域にたくさんいることを知っていただきたいと思いますし、一人でも多くの方々にご自身の「かかりつけ医」を見つけてほしいと考えています。

また、医師の側でも、国民の皆さまから「かかりつけ医として選ん」でいただけるよう、その機能をより高める努力を続けていく必要があると考えており、日本医師会としても地域医療を守るため、その支援を継続してまいる所存です。

副島直樹社長　太陽生命保険

重要性増す「かかりつけ医」

「赤ひげ大賞」を受賞された5人の皆さま、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆さま、誠におめでとうございます。

令和4年度も新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受ける1年となりましたが、感染の拡大により健康への直接的な影響はもちろん、コミュニケーションが希薄になることや、正しい情報を選択できず不安やストレスを抱えるなど間接的な影響も深刻な問題になっています。そのような状況において地域に根差し、人々に寄り添い、信頼関係もある「かかりつけ医」の先生方の存在はますます重要になっています。

当社は長年にわたり地域に密着し、ご家庭に寄り添ってきた保険会社として、平成29年から地域に密着して人々の健康を支える「かかりつけ医」である医師の功績をたたえる顕彰制度である「赤ひげ大賞」に特別協賛させていただいています。「赤ひげ大賞」をより多くの方に知ってもらうことで、地域医療の充実や理解促進につなげていきたいと考えております。

最後になりますが、当社はこれからも地域で献身的な医療に取り組む赤ひげ先生と同じように、多くの方々の「元気・長生き」をサポートするため、商品やサービスの充実を図ってまいります。また、全国各地の赤ひげ先生のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

「日本医師会　赤ひげ大賞」
日本医師会と産経新聞社が共催し、地域に密着して人々の健康を支えている医師の功績を顕彰。広く国民に伝えるとともに、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として平成24年に創設された。全国の都道府県医師会から推薦された候補者から、毎年1回、大賞・功労賞の受賞者を選考委員で選定し表彰する。今回は新たな試みとして、選考委員に医学生の代表（岩手医科大学生）が加わった。

■推薦方法と推薦基準

【推薦方法】本賞受賞にふさわしいと思われる医師1人を各都道府県医師会長が推薦

【推薦基準】病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員および都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く）

公式ホームページ

25日　BSフジで特別番組を放送

「密着！　かかりつけ医たちの奮闘～第11回赤ひげ大賞受賞者～」
放送日：3月25日（土）14：00～14：55

【主　　催】日本医師会、産経新聞社
【後　　援】厚生労働省、フジテレビ、BSフジ
【協　　力】都道府県医師会
【特別協賛】太陽生命保険

元気！長生き！　太陽生命

ひとりひとりの
元気！長生き！に、寄り添う。

人生100歳時代。
元気で長生きするために、今からできること。
そのひとつが、病気を「予防する」ことです。

だから、太陽生命は病気に"備える"だけでなく、
病気に"ならないため"の保険を開発。
給付金を、検査などの予防にも活用できます。

保険に入ることで、健康をたもつ。元気になる。
そんな未来をつくっていきたいから。
太陽生命の保険は、予防に向かって進んでいます。

保険で、認知症を予防!?

ひまわり認知症予防保険

※当広告では選択緩和型認知症診断保険に生存給付金特則を付加したプランを「ひまわり認知症予防保険」としてご案内しています。

［太陽生命資料請求ダイヤル］営業時間：月~日　9時~17時　※左記以外は自動音声にて24時間受付しています。※祝日・年末年始（12/30～1/4）は休業します。
0120-04-22-33（通話無料）
太陽生命
さあ、保険の新次元へ。
T&D保険グループ

患者への思い糧にして

さくらい・えつ　住友医院副院長。昭和21年、徳島市生まれ。76歳。45年、徳島大学医学部卒業。高知赤十字病院、国立高知病院（当時）などを経て58年から住友医院副院長（平成12～14年は院長）。地元小学校、幼稚園で長年、校医や園医を務めたほか、徳島県医師会で女性医師が活躍できる環境づくりに取り組んだ。

桜井えつ氏（徳島市）

女性医師の活躍する場 拡大に尽力

眼科医の祖父が開業し、内科医の父が継いだ「住友医院」の三代目として、地域から信頼されるかかりつけ医だ。夫で院長の紀嗣さんは「患者さんの顔を見ると、病歴やご家族の背景がすぐに出てくる。患者さんにとって非常に心強いと思う」と評するが、「私はありふれた町医者、専門性もないし、患者さんへの思いがなかったら続けてこられなかった」と謙虚に語る。

徳島大医学部時代、「多くの人の支えで医師になるのだから、生涯（医師を）やめないでおこう」と同学年の女学生とよく話していました。それでも、現実は厳しかったです」。地元の人は快く迎えてくれたが、勤務医時代は、患者から「女医さんか」と落胆されることもあった。産休や育児で休むからと、女性医師を採用しない病院や入局を拒む教室もあった。

若い世代に、同じ思いをさせたくない。医師の労働は過酷だからこそ性に適さないという意見には、医師の人的な足やグループチーム制でカバーできると考えた。「医療の領域の広がりから、女性医師が活躍しなければならない時代が必ずくる」。患者に寄り添える、女性に有利な医療もあるはずだ。

県医師会の会報に女性医師のページ2を創設したのを皮切りに、女性医師の働き方を実態調査し、平成14年には県医師会に全国2番目の「女性医師部会」を立ち上げた。女性医師が活躍できる場の一つとして、男女の差異に基づいた医療を提供する「性差医療」にも目を向けた。こうした活動や社会の情勢変化から、女性医師に期待する病院も増え、女性医師への支援が多くなされるようになっている。

後進の活躍を喜びながら、現在はベテランのスタッフと医師夫婦で守る自称「老老診療所」で診察や来院できなくなった患者宅への往診・訪問診療に力を尽くす。

「医師にさせてもらった以上、甘えないで続けようと思ってきました。もう少し、患者さんのために頑張ろうと思っています」

恩返しの道は、続く。

（文・道丸摩耶、写真・柿平博文）

藤野孝雄氏（大分県臼杵市）

行政巻き込み糖尿病、認知症対策

ふじの・たかお　藤野循環器科内科医院理事長・院長。昭和26年、大分県臼杵市生まれ。71歳。九州大学大学院医学研究科修了。米ノースカロライナ州立大学医学部心臓内科の客員研究員、北九州市立門司病院などを経て、平成5年に現医院を継承開業した。

大分県の東南部、人口約3万5千人の臼杵市で江戸時代から続く医師の家系。平成5年に両親の跡を継ぎ、一患者の立場に立った医療を続けてきた。「親子孫三代がかりつけ」という地域住民も多く頼りになる「先生」だが、それだけではない。

多くの患者を診るうちにあることに気づく。「糖尿病の患者が増えている」。専門知識の必要性を感じたが、臼杵市には専門医が1人しかいなかった。地域のかかりつけ医に声を掛けて勉強会を始め、13年に「臼杵市糖尿病ネットワーク」を発足させた。専門的な知識や県糖尿病療養指導士資格を取得できる研修会を126回開催した。

22年には行政、保健所なども巻き込んだ「臼杵市糖尿病等生活習慣病対策ネットワーク推進会議」を立ち上げて代表に就任、早期受診につなげるシステム、重症化させないプログラムなどを作り上げた。糖尿病から人工透析となる割合で、県平均が1・5％（平成3年）から2・2％（令和3年）に増加した時期に、臼杵市は1・54％から1・13％に減少。国保医療費抑制にもつながっている。

同じようなケースが認知症でも。認知症患者の増加を感じて予防・早期診断の必要性を訴えて平成18年に「かかりつけ医対象の認知症勉強会」をスタート。22年には大分大、臼杵市、医師会の協同で「臼杵市の認知症を考える会」を発足させて代表世話人となった。講演会を何度も開催し、市民の知識や理解を深めた。

医師会理事としては夜間救急診療当番輪番制度の見直しを繰り返し、消防や専門病院とも連携してスムーズな診療体制を整えた。70歳を超えて当番免除となったいまも当番を引き受けている。糖尿病、認知症、救急体制など地域全体を考えた取り組みで動きつつ、通常診療に加えて20～30軒の訪問診療を毎月続けている。

周囲を巻き込み、自身もその中心として前に進み続ける“スーパーかかりつけ医”。

「田舎でも都市部と同じ医療を受けてほしい」。「すべての病気はチーム医療」という言葉が活動の原動力なのかもしれない。

（文・中野謙二、写真・宮元雄太）

大久保直義氏（鹿児島県姶良市）

「誰一人取り残さない」信念を貫く

おおくぼ・なおよし　希望ヶ丘病院理事長。昭和8年、満州（現・中国東北部）生まれ。89歳。40年、鹿児島大学大学院医学研究科修了。同第一内科学教室を経て、45年に希望ヶ丘病院開業。その後、地元の要望に応え保育園、特別養護老人ホーム、老人保健施設、グループホームなどを次々と開設した。

鹿児島県の中央部、錦江湾の奥に面する姶良市。鹿児島市のベッドタウンとして人口が増加してきた一方、地域のつながりが薄くなってきたことも指摘される。

そのような中、「地域で誰一人取り残さない」との信念のもと、病院を核に特別養護老人ホームなど高齢者に合ったさまざまな施設を開設、保育園など次世代のための施設も敷地内に併設した。今では当たり前のように行われている幼・老の交流を昭和50年代に始めるなど、住民の健康を守るだけでなく、人のつながりの構築にも心を砕いてきた。

「高校のころ、医師だった父の跡を継ごうと漠然と思って」、鹿児島大医学部に進学。心療内科を選び、教授から「医師は身体だけでなく、精神的、社会的な面からも患者を診ないといけない」といわれ、その教えを守ってきた。「社会的」とは経済面や人間関係を含む家庭や職場、地域社会などを指し、そのことが医療だけでなく福祉や地域への貢献に対する強い思いとなっている。

姶良市には特にゆかりはなかったが「両親が鹿児島市に住み、妻の実家が霧島市だったので、その中間点で行き来しやすい」との理由で、昭和45年に「希望ヶ丘病院」を開業。志に共感した妻の踏子さんと二人三脚で周辺に保育園、特別養護老人ホーム、看護・リハビリ・介護に重点を置く老健施設、認知症の高齢者が共同生活するグループホームなどを開設していった。

いずれも地域の要望に応えたもので、保育園は地域の働く親たちの支えとなり、各施設は地元で雇用も生み出している。

さらに、病院ではいち早く小児発達外来を設け、保育園では病児保育も行うなど、次世代に対しても「誰一人取り残さない」を実践してきた。

趣味の古民具集めを生かし、平成24年には「重冨民俗資料館」をオープン。小学生が地域学習の場として利用するほか、高齢者には古民具を使って認知機能改善のための「回想法」を行っている。

医師になって61年。「思い描いていたことはほぼできたかな」と振り返った。

（文・山本雅人、写真・沢野貴信）

第11回　日本医師会 赤ひげ大賞

赤ひげ功労賞受賞者（15人）

中野　智紀（埼　玉）東埼玉総合病院地域糖尿病センター長／地域ケア拠点菜のはな室長
新田　國夫（東　京）新田クリニック院長・理事長
佐藤眞紀子（神奈川）フロムワン付属診療所院長
大瀧　達郎（福　井）大滝クリニック院長
野尻　眞（岐　阜）白川病院理事長・院長
水本　弘（静　岡）浜北さくら台病院名誉会長
清水　信（三　重）上津台小児科クリニック院長
田代　博（京　都）田代医院開設者・管理者
梅川智三郎（奈　良）梅川医院院長
森本　忠雄（広　島）森本医院院長
八木　正人（香　川）池田内科クリニック理事長・院長
古賀　正昭（福　岡）古賀医院院長
朝長　弘道（佐　賀）朝長医院元理事長
寺尾　敏子（熊　本）寺尾病院理事長
嘉手苅　勤（沖　縄）南部徳洲会病院元副院長

選考委員コメント

羽毛田信吾委員（恩賜財団母子愛育会会長）　コロナ禍により地域医療が逼迫（ひっぱく）するなかで、特にがんばっている先生を選んだ。厳しい状況に置かれながらもいかに地元に密着し、地域づくりに貢献しているかという視点を大切にした。

向井千秋委員（東京理科大学特任副学長）　どの先生方もすばらしかったが、「長年にわたり」という継続性を重視して選んだ。また、診断や治療だけでなく、地域で予防医学や健康教育に取り組んでいる先生も評価を高くした。

檀ふみ委員（俳優）　選考に非常に悩み、大賞の選に漏れた先生が気の毒で仕方ない気持ちになった。身を粉にして働く先生が選ばれるのはいいとしても、こういった先生方ばかりに負担をかけてしまっていいのかという気持ちにもなる。

ロバート　キャンベル委員（早稲田大学特命教授）　コロナ禍のなか、かかりつけ医の重要性が再認識されてきていると感じる。今年の選考では、地域の一つ一つの課題解決について自身の力を割いている先生を高く評価した。

榎本健太郎委員（厚生労働省医政局長）　初めて選考に臨んだが、さまざまな形で地域に貢献する先生を顕彰する本賞には大きな意義があると感じた。大賞に女性2人が選ばれたことも、今後の女性医師の活躍を見据えると意義深い。

医学生（岩手医科大学／令和4年度）

・学生という立場から選考に参加させていただきありがたい。選考で当落こそついたものの、各先生とも信念を持って医療を行う姿に感動し、どんな医師になるべきか考える契機となった。

・選考に参加して大変勉強になった。2人の女性が大賞に選ばれたが、結婚や育児などとの両立が難しい時代に活躍してきたことはすごい。自分が女性医師として働くうえで大きな希望になった。

元気！長生き！　太陽生命

保険に入って、
元気になる時代へ。

もし、病気に“ならないため”に使える保険があったら。

予防給付金※1＋一時金最高2000万円
加入の1年後から2年ごとに検査等に使える予防給付金が受け取れ、がんと診断されたとき、所定の重大疾病状態に該当の場合は一時金でしっかり保障します。
※1 予防給付金の受取には生存給付金特則の付加が必要です。

アミノインデックス®リスクスクリーニング※2
血液検査で複数のがんの可能性と、脳卒中・心筋梗塞、糖尿病の発症リスクを評価します。
技術開発：味の素株式会社
※2 この検査は確定診断するものではありません。

ガン・重大疾病予防保険※3
※3 この保険は、10大疾病保障保険に生存給付金特則を付加し、その予防給付金を疾病予防サービス等に活用いただきたいという思いから「ガン・重大疾病予防保険」という愛称を使用しています。

スマホでスマート。お申し込みカンタン。　太陽生命

さあ、保険の新次元へ。
T&D保険グループ